

# 会報

No. 94

平成28(2016)年3月15日

[http://www.library.pref.kyoto.jp/?page\\_id=28](http://www.library.pref.kyoto.jp/?page_id=28)

京都府図書館等連絡協議会

事務局

京都市左京区岡崎成勝寺町9

京都府立図書館内

TEL (075) 762-4655

<目次>

1～2面

・「国際(多言語)おはなし会」の  
実施について  
(京都市中央図書館)

2～3面

・実務研修会参加報告

4面

・第24回京都図書館大会に  
参加して  
(京都府立図書館)

平成二十五年度子ども読書の日記念事業のひとつとして、初めて催した「国際(多言語)おはなし会」ですが、その後も年に一度のペースで、継続的に実施しています。そのきっかけは、当館に所蔵する複数の多言語絵本が、ほとんど利用されず書庫に眠っている現状を非常に残念に思ったことからでした。これらの絵本をもっと紹介する方法はないだろうか、できれば絵本に用いられている言語を母国語とする方々に読み聞かせしていただければ…と思いは膨らむばかりでしたが、具体案はまだ何もない状態でした。そんな中、一般社団法人日本国際児童図書評議会 (IBIA) 主催の巡回展示「世界のバリアフリー絵本展」を見学するため大阪府内の図書館に伺ったところ、偶然にもその巡回展示で紹介されている多言語絵本を使ったおはなし会が実施されており、留学生の方々による読み聞かせと参加している子どもたちの楽しい様子を見て、自館でも実現させたいという思いを強くしました。またその会は読み聞かせの他にも、外国語の挨拶や遊びなど異文化を紹介する機会にもなっており、それらを合わせることで、ひと



つの行事として十分に成立すると確信できたことも実現に向けての後押しとなりました。

しかしながら、いざ実施するとなると、読み手をいかに確保するかが大きな課題となりました。読み聞かせをお願いするあてもない中、できることは何かと模索し、まずは留学生を多く受け入れている近隣の日本語学校や大学に電話で依頼することから始めました。今思えば何とも無謀な試みですが、幸運にも最初に連絡した「公益財団法人京都日本語教育センター・京都日本語学校」の玉柏事務局長(当時事務局長)が興味を示してくださり、善は急げと直接学校へも出向き事業の趣旨をお伝えしたところ、大変快く協力を約束してくださいました。



初めての「国際(多言語)おはなし会」

初めての会では、中国・台湾・フランス・イタリア・ウクライナ出身の留学生の方々、次年度はタイ、シンガポールの

方など、多くの留学生に出演いただくことが叶いました。実施までの打ち合わせで、まず留学生に対して読み聞かせとは何かから説明します。絵本の持ち方めくり方など、毎年図書館で実施する読み聞かせ講座の内容も取り入れてレクチャーしますが、これまで経験したことのない手法に戸惑いを見せる留学生も多く、最近では二人一組、持ち手と読み手の役割分担制としています。



持ち手と読み手 役割を分担

読み聞かせに使用した作品は中国語では『虎王子(ウエン王子とトラ)』や『宝儿(パオアルのキツネたいじ)』、フランス語では『Un livre (まるまるまるのほん)』や『Gaspard et Lisa au Japon(リサとガスパールにほんへい)』、イタリア語では『L'uomo del camion(たんじょうびのおくりもの)』などで、日本語に翻訳された作品も当館では所蔵しています。日本語のこのセリフは、原書ではこんな風に発音さ

れるのかと大人でも興味深いものですが、子どもたちにも言葉の意味はすべて理解できなくても、その音の響きを楽しんでもらうことができます。また、読む強弱により心の動きが伝わるのは日本語の絵本の読み聞かせとも共通する部分ではないかと思えます。実際にはなし会に参加してくれた子どもたちの反応ですが、最初は何が始まるのだろうか：と不思議そうでしたが、次第に絵本の世界に入り込んでいきます。また外国語絵本は難しいと感じる子どもたちも、その後の時間に行う各国の挨拶や数の数え方、じゃんけんなどの遊びを一緒に楽しんでくれていきます。そして参加者から毎回好評をいただいているのは、多言語でひとつの歌を歌うという試みで、『幸せなら手をたたこう』『アナと雪の女王』『Happy Birthday to you』など、言葉は違えど同じメロディーを歌う一体感に心温まる時間となっています。

### 実務研修会参加報告

◎北部会場

「絵本と子どもが出会ったら

く年齢別の読み聞かせ」

日程 平成二十七年十一月十八日(水)  
場所 宮津市労働会館  
講師 徳永満理氏  
(兵庫大学短期大学部保育科)

◎中部会場

「障害者の権利に関する条約批准と今後の図書館サービス」  
日程 平成二十七年十月七日(水)  
場所 京都府立図書館  
講師 太田順子氏  
(日本障害者

リハビリテーション協会)

仁科豪士氏  
(京都府立図書館)

◎南部会場

「図書館利用者としてのシニア世代とは」  
図書館はシニア世代に何ができるのか」  
日程 平成二十七年十二月三日(木)  
場所 宇治市中央公民館  
講師 呑海沙織氏  
(筑波大学

図書館情報メディア系)

### 北部研修に参加して

京丹後市立あみの図書館

小森 美希

日頃、ブックスタートや乳幼児向けの読み聞かせなど特定の年齢層に向けた読み聞かせを行う中で、それぞれの段階に応じた本選びや読み方が必要だ

と感じていました。今回は、年齢に応じた絵本の読み聞かせについて学びたいと思い、参加させていただきました。

講師の徳永満理氏は、園長をされていた兵庫県のおさなご保育園での子どものためのエピソードとともに絵本の読み聞かせを交えて、保育の観点からことばの発達と絵本の関係について講演されました。また、御自身で絵本を書かれたときの、イメージを喚起することば選びの苦労についても語っていただきました。

子どもは耳からことばを覚えるので、絵本の読み聞かせが話す力・聞く力を育てます。

ことばでイメージを作れるようになる、見たと・つもりの世界に入れるようになっていき、自分が主人公になり、気持ちをことばにしてくれる絵本に共感したりできるようになるそうです。集団で読むときにも、見たと・つもりを全員に同じようにすることが大事だということ、大人数のときや時間の制約があるときにも、ひとりひとりに向き合っていかなければならないと感じました。そして、いろいろな作品と出会ったことで、現実と空想を判断・判別して楽しむことができるようになり、文学として捉え、そこから自己形成に取り組みようになるそうです。読み聞かせることにより、客観的に物事をとらえ他人目線になれるので自分を振り返ることもできると

も話されました。

特に印象に残っているのは、絵本と遊びをつなぎ、聞くだけでなく体験すること、ことばが心と体に根付いていく、読み聞かせが終わっても子どもの中ではおはなしの世界が続いているという話でした。先生の保育園では、絵本と体験を結び付け、読み聞かせの余韻を大切にするために、『おおきなかぶ』を読んだあとに、実際に調理室へ行き、かぶを見て食べてみるという活動につなげたこともあるそうです。受動的に話を聞くだけではない楽しさがあり、絵本の記憶も強く残る素敵な取組だと思いました。

今回の研修では、絵本のもつ力を改めて実感するとともに、子どもにとって重要なことばを育む時期に関わっていることの責任を再認識しました。保育園のように実際の体験を準備することはなかなか難しいですが、図書館での読み聞かせの時間に絵本に出でた物語に関連した手遊びや工作を組み込み、絵本への興味関心を深めていけたら、と思いました。

### 中部研修に参加して

京都府立総合資料館

祖父江長良

自治体に勤務する者として、障害者に対しての配慮を業務の中に反映させ

るためにも、まずは法律について正しく知りたいという思いから今回の研修に参加いたしました。

最初の講演では、平成二十八年四月一日に施行される障害者差別解消法の、批准までの流れと施行後の責務について詳しい説明がありました。講演では参考サイトが多数紹介され、ホームページの作り方について良い点、不十分な点が指摘されました。

例えば京都府では「京都府障害のある人もない人も共に安心していきいきと暮らしやすい社会づくり条例」を既に平成二十七年四月に全面施行しています。京都府のホームページを他府県と比較し、HTML版、PDF版、音声版等と、同じ情報でも手法を変えて公開されている事例が紹介されました。これは、ひとつの方法だけでは情報にたどり着けない人がいることを踏まえた配慮が必要であることを示唆しています。

続いての講演では、サピエ（視覚障害者情報総合ネットワーク）の研修用のIDを使って、実際の画面を見ながら検索結果からダウンロードまでの説明がありました。サピエから音声や点字データを取り込むには会員登録が必要ですが、検索は誰でもできるそうです。京都府立図書館は今年度サピエに団体登録したところ、利用状況はダウンロードとCD(DAISY)資料の

貸出申込が半々とのことでした。今後のサービス展開については、例えば連絡協力車を使った府域へのDAISY資料の貸出サービスが行えないか検討しているとのことでした。

講師の仁科氏自身が全盲であることもあり、「マウスではなくタブキーを使うので、項目の多いページはキーボード操作だけで大変」といった実際の話は参考になりました。公開したばかりの当館のホームページ「京の記憶アーカイブ」にも反映すべき声だと思いました。

障害者差別解消法が施行されると、障害がある利用者からの要望を「うちでは対応できない」として他館を紹介するのではなく、可能な限り自館で対応する方法を考えることになります。

講演後の意見交換の場では、図書館に足を運べない利用者の移動の問題も課題としてあげられました。来館できる方と自宅で利用する方、双方へのサービスを充実させるとともに広報することの必要を感じました。

国と自治体には差別解消の取組が義務化されます。法律で決められたからではなく図書館サービスの基本に立ち返って、という太田氏の助言を受け、今後の仕事に活かしたいと感じた研修でした。

## 南部研修に参加して

宇治市中央図書館  
宝壁 香織

いま日本は、人口のおよそ二十パーセントが六十五歳以上という超高齢化社会を迎えています。当館でもシニア世代の利用者は多く、図書館を支えるひとつの大きな柱になっていきます。「シニアサービス」と聞いてすぐに思いつくものは、大活字本や録音資料の貸出、そして予約配本サービスですが、それ以外にどのようなサービスが必要とされているのか、他館の取組などについて学びたいと思い、今回の研修に参加させていただきました。

まず初めに説明されたことは、シニア世代が図書館に期待する役割は様々ではないということでした。

シニア世代の中でも若い層は「学習の場・生きがいづくり」を求めています。その一例として、カナダの「ワーキングトゥギャザープロジェクト」が紹介されました。特に、図書館のヤングアダルト担当者が企画した「シニアのためのコンピュータスキルプログラム」は、ティーンエイジャーが高齢者に対し、コンピュータスキルを教えるもので、学習を超えた異世代間の交流を生み出すきっかけとなり、高く評価されているそうです。

また、シニア世代の中でもより高齢の層には、「ケア」の役割が期待されています。今回は、イギリスで行われているふたつの取組が紹介されました。ひとつは、「回想法コレクション」

の貸出です。回想法とは認知症の人に對して行う、懐かしいものに触れることで会話を促す認知行動療法をいいます。図書館はこの「懐かしいもの」のセットを独自に作成、貸出しているそうです。ふたつ目は、精神疾患の患者に對して推薦図書を出する「処方箋としての読書プログラム」です。どちらの取組も、支援や治療の一環として期待されているとのことでした。

今回紹介されたサービスはすべて、図書館という空間や本に對し、積極的に付加価値を加えアプローチしていく取組であると感じました。日本でも、愛知県立図書館などが回想法コレクションを実施しており、秋田県立図書館では高齢者向け資料のスペースを「メディアコレクション」という名称にするなど、各地で趣向を凝らした高齢者サービスが行われています。

研修を通じ、シニアサービスの提供には図書館の外に目を向けることが重要であると感じました。今後は、図書リストの提供やイベントの共催など、他機関との連携をより一層活発にし、それらを通じて得られた高齢者ニーズを、図書館運営に反映していきたいと思えます。

## 第二十四回

## 京都図書館大会に参加して

京都府立図書館 望月佑梨絵

平成二十七年八月十七日同志社大学寒梅館ハーディーホールで開催された第二十四回京都図書館大会に参加しました。

今回は「インターネット資源を活用するオープンデータと図書館」をテーマに、図書館機能の新しい形が模索されるなかで、情報流通に革新をもたらすとして近年注目されているオープンデータを議論の中心にすえ、ふたつの特別講演と二件の事例発表が行われました。

まず立命館大学教授常世田良氏より「図書館の機能を見直す課題解決型サービスとオンライン資源」と題した講演が行われました。常世田氏は、日本の社会が与えられた課題を所与の情報や手法によってこなす「キャッチアップ型」から「自己判断・自己責任型」へと変容していることを指摘し、さらに図書館に求められる課題解決型サービスについて、ビジネス支援サービスや医療健康情報サービスなど各地の先進事例を挙げて紹介されました。そのなかで、サービス提供の要点をオープンデータの手法と絡めて解説

し、情報が氾濫している今日こそナビゲータとしての資質を持つ司書の役割が重要であると説き、あらゆる場所での情報の入手を可能にするためには、地方にこそ質の高い図書館が必要であると述べられました。

続いて国立情報学研究所准教授の大向一輝氏より「オープンデータをつかう図書館、オープンデータをつくる図書館」をテーマに講演が行われました。オープンデータとは何か、現在に至るまでの背景を国内外の動向とともに解説されました。また図書館におけるオープンデータへのアプローチについて、図書館が自らデータを作成することと利用者のデータ作成への支援の二種類を述べ、前者では「ししよまろはん」と「残念な日本地図」、後者ではWikipedia Townを紹介されました。そして見知らぬ他者に情報を委ねることの難しさに触れながらも、まずは小さなことから始めて道筋を作っていくことが重要であると述べられました。

事例発表では、国立国会図書館の福山樹里氏より「国立国会図書館のデータ利活用の取組〜Linked Open Dataを中心に〜」と題し、福山氏が担当する業務内容に関する発表がなされました。同館では、膨大なデータをウェブ上で扱いやすい形で提供するという業務を行っています。これらをリソース

にあわせて可能なことと調整を要することとに切り分け、的確に進めていく状況がユニークなスライドとともに説明されました。

「ししよまろはん」代表の是住久美子氏からは「京都府立図書館の自主学習グループによるオープンデータへの取組」と題し、自主学習グループ「ししよまろはん」での取組が紹介されました。同グループでは、図書館員がオープンデータを学び、実際に利用して「京都が出てくる本のデータ」、「京都レファレンスマップ」を作成したほか、京都まちあるきオープンデータソンに協力するなど様々な情報の発信を行っているとのことでした。今後は「ししよまろはん」での取組を活かし、京都府立図書館の職員として情報のオープン化を積極的に働きかけていきたいと述べられました。

今大会では様々な館種から百八十名の参加があり、オープンデータという新しい動向に対する関心の高さが感じられました。いずれの講演、報告とも非常に示唆に富むものであり、質疑応答ではデータベースの広報に関する議論や、オープンデータの使用実態の把握が困難なことを前提に成果をどのようにに捉えるかといった議論が行なわれ、参加者にとって有意義な大会となったことがうかがえます。今回の大会を通じ、図書館が書籍を中心としな

がらも「情報」を扱う機能を持つ以上、今後オープンデータを自ら創り出していく必要があるということを深く感じました。



Ⅱ会報をホームページに掲載Ⅱ  
第九十四号を、京都府図書館等連絡協議会のホームページ（URLは一面参照）に全文掲載しています。御利用ください。